みんなのスペース

むらき かなみ ちゃん
（山田中央保育園・５歳）

わたしのゆめ

大きくなったら看護師さんになりたいな。お母さんのような看護師になって一緒にお仕事したいから。

古里への便り㉔

ふる里山田同郷の会幹事
神奈川県横浜市
井上陽子さん（64歳）
〔八幡町出身・旧姓杉本〕

山田町の皆さまこんにちは。山田湾の美しい風景を眺めながら健やかにお過ごしのことと思います。

私は山田小学校、山田中学校、宮古高等学校、東京の昭和女子大学英米文学科を卒業し、現在横浜の西区に住んでいます。家族はお蔭様にてみんな元気で、男の子の孫二人も同じマンションに住んでおり、都会ではめずらしいぐらいにぎやかな生活ぶりとなっています。横浜に来てからは若いころよりずっと長い間、地域のボランティア活動に励んできましたが、地域の活動的な方々とも知り合い、触れ合いの輪が広がり、今は生きがいともなっています。

横浜駅近くの地域ですので、地域柄時代の流れを敏感に受ける所であります。その中にあって横浜のハーバーの海と栽培の海である山田湾との特徴を良く考えるときがあります。国際的な船の行き交う海と静かな海の下で育てられている海の幸を思うとき、どちらも知っている自分を幸せに感じるようになりました。また、山田八幡宮のお祭りのことを思い浮かべ、宵宮の真っ暗な境内でかがり火に照らされて舞う幻想的な鹿舞などについて友人にお話しますと、「陽子さんの古里自慢が始まった」と言われたりしております。

その古里自慢から発しまして、平成15年8月3日に横浜のボーイスカウト第58師団の方々が山田町に行くことになりました。その節には皆さまに良くしていただきまして、本当にありがとうございました。この紙面を借りて厚くお礼申し上げます。ボーイスカウトの方々も大変喜んでおり、青春の素晴らしい思い出が鮮やかな印象として団員の心の中に残ることと思います。都会のめまぐるしい中にあって、ますます地域活動の輪を広げていくことの大切さも実感しています。伝統のある町を守り、海を守ってくださっている山田町の方々に感謝申し上げますとともに、ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

イラスト

投書

どんなことでも結構です。どしどしお寄せください。

達増知事の誕生に期待感

以前、全国で最年少の増田岩手県知事が誕生したが、今回の知事選でそれを1歳更新する42歳の若い達増氏が当選した。45万票台の得票での圧勝だったが、その結果を見て何となく東北岩手にもこんな若年政治家が存在することに、私たち県民の一人として誇らしく感じた。

達増氏の勝因は、有権者に若さや抱負を期待させ好感をもたらしたことにある気がする。私たち有権者は、この若さと行動力に期待するし、また、岩手日報4月9日付にも「知事初当選の達増氏に聞く」の欄には「県民生活を優先させるとの二大原則を徹底したい」とあるなど、私たち県民の期待感も大きい。

それにしても本町に県議会議員が消えたことに残念でならない。選挙の厳しさを痛感した。

齋藤忠雄（船越・81歳）

広報クイズが毎回楽しみ

広報クイズでこれまでに図書カードが2回当たりました。1枚は姉の誕生日プレゼント。もう1枚は最初で最後？の自分へのプレゼントになり、とてもありがたく思います。広報クイズを毎回楽しみにしています。

佐藤啓子（船越・？歳）

元気を与えてくれる桜花

「桜三月菖蒲は五月」と古い言葉がありますが、3月どころかまだ寒も明けやらない2月中旬につぼみがほころび、下旬にはちらほら開花が見られるめずらしい桜の木が、船越の伊藤さんのお庭で今、たくさんの花を付けました。まだ桜前線の遠い当地でわが物顔に咲き誇る木があることを紹介します。

その桜の正確な学名は分かりませんが、白いかれんな花です。聞くところ静岡桜とか産地名を言っておりました。毎日愛犬と散歩するコースの庭先にあるので、まだ寒い最中に精いっぱいに咲く桜花は、今日も楽しさと元気を与えてくれます。

西舘隆（船越・？歳）

ツバメの飛来に思うこと

4月始め、ツバメがわが家を忘れずに、今年も入ってきた。

幼き日、母から聞いた話しを思い出している。「昔からツバメが巣をかける家は良いことがあんだって」と、聞かされた。そう言えば子供のころ、筋向いのSさんの軒下3カ所で巣作りするツバメが飛び交い、近辺の人たちの心を和ませた。

世の中が生きるのに精いっぱいの時代に、Sさんは伊勢参宮や永平寺参り。私の家にもツバメが巣作りすれば、Sさんと信仰心の厚い母がお参りできるのにと子供心に思った。無垢なあのころが懐かしい。

菊地サカヱ（織笠・72歳）

◇　◇　◇

長電話さびしさつなぎ友の声
互いの一人居なぐさめたら
ペンネーム・Y子
（織笠・？歳）

六十路まで選挙ウグイス四十年
我が人生の自分史かざる
大川ヒメ子（大沢・62歳）

春雨やしとしと降りし
今日の日は安心ぎ願い
パンを焼きける
大町テイ子（大沢・？歳）

老妻は旅立ち広き一人部屋
よいの窓辺に春雨の降る
菊地孝進（船越・85歳）

風揺らぎ一ひら散りぬ宵桜
ペンネーム・夢子
（田の浜・65歳）

おらが町生まれ変わるか町議会
佐藤兼男（荒川・80歳）

大浦に「まかだ風」が吹くころ

『寒の前の、土用の後』。大浦での古くからの気象のことわざに、このようなことわざが用いられている。暦の上では〝寒〟や〝土用〟はきちんと決まっているが、大浦では寒さが到来するのは暦上の寒の前であり、一方暑さは暦上の土用の後の方が暑いことを言っている。

今年の冬も大浦特有の寒い北西の強い風が吹き付けた。この時期によそから大浦を訪れる人たちはみんなが「大浦って寒んぷうがなんす」と言っている。この寒い北西の季節風を大浦では「まかだ風」と称している。この寒い「まかだ」が吹くときにつけ、物心がついたころに姉にひどくどめがった（しかられた）ことが思い出される。この思い出は私だけでなく大浦の人たちは大なり小なりあると思っている。このことを言うのは今ではほとんど目にすることも無くなった木の盥である。

『なんで、おめいさん、人の言うことの聞き分けがねいんだ。言うことを聞かなかったら、盥さ入れて大沢へ流してやっからな！それがやったがったら（嫌だったら）人の言うことをちゃんと聞くもんだがよ』と、ひどくどめがったのを覚えている。『あのね、おめさんはな、今日みたいに「まかだ」が強く吹き、寒んぷう日に港の砂浜さ盥さ乗って、鼻水を垂らして、大きな目汁を流して、波に打ち上げられ泣いていたのを、ちぁっちぁ（父）がめっけいで（見つけて）、かわいそうにと拾ってきたのをかかさん（母）が今までおがして（育てて）きたんだがら、ありがたいと思ってみんなの言うことを良く聞くもんだがよ』と、諄々と諭され、一時的に「俺は大沢から…」と、対岸に見える大沢を見たりしたもんだった。

今、われが歩みし人生を振り返ってみるに、3人の子があるが、子供が幼少時にこの話で子供のしつけをしたかどうかまったく記憶にない。幸いにも二親とも健在であったので、わが子の養育にはほとんど父親、母親にゆだねていた。今思えばあの時代、子供のしつけによき時代だったと思う。

4月とはいえ、まかだ風が吹きそうな寒い日が続いている今日このごろである。

山﨑卓三（大浦・78歳）